

想定する読者の読者反応によるノンフィクションを読むことの指導

— Jean Anne Clydeらの吹き出し法 (subtexting) を手がかりとして —

足 立 幸 子

1. はじめに

ノンフィクションとは、「フィクション（虚構）でない」読み物の意味で、英語圏の読むことの指導において、一般的に使用されている語である。ノンフィクションとはジャンルの一種であり、主に知識や情報を伝えることを主眼にしたものである。我が国で言うところの「説明的な文章」はもちろんその代表だが、文章に限らず、新聞・雑誌・本・冊子・リーフレット・ウェブサイトなど、様々な媒体のものを含む。OECD（経済協力開発機構）が15歳の生徒に実施している国際学力調査PISAの読解力のテストでフィクションにあたる「叙述」はわずか15%であり、それ以外のノンフィクションにあたる「議論」「記述」「解説」「指示」が85%を占めている。PISAは、15歳生徒が社会に参加していく際に必要とされる読解力を測定しようとしているのであり、やはり実生活の中において、ノンフィクションのテキストに触れる機会が多いと想定していることと言える。表1は、アメリカの4年生・8年生・12年生（日本ならば小学4年生・中学2年生・高校3年生にあたる）に対して行われるNAEP（National Assessment of Educational Progress）という学力調査の読むこと（reading）で用いられるテキストの割合を示したものである。年齢が上がれば上がるほど、フィクションである文学的テキストの割合は減り、反対にノンフィクションである情動的テキスト・課題的テキストの割合が増えていることが分かる。

表1 NAEPで用いられるテキストの学年における割合

テキスト	4 年	8 年	12 年
文学的テキスト	5 5 %	4 0 %	3 5 %
情動的テキスト	4 5 %	4 0 %	4 5 %
課題的テキスト	な し	2 0 %	2 0 %

しかし、我が国の読むことの指導、とりわけ読書指導では、フィクションである文学・小説を扱うことが多く、ノンフィクションを扱うことは少ないように思われる。もちろん説明的な文章を、段落構成・論理展開・筆者の表現上の工夫などについて読解する授業は頻繁に行われているが、実生活における様々なノンフィクションを読むことの指導はあまり行われていない。

そこで、本稿の目的は、このような問題状況をふまえ、ノンフィクションを読むことの指導について、読者の側からの新たな指導法を開拓することである。ノンフィクションを読むことに対して高い割合を示している海外の指導例を参照することにした。本稿で手がかりとするのは、具体的には、アメリカの国語教育研究者であるJean Anne Clydeらの吹き出し法を用いた方法である。その特徴は、読者を想定し、その想定した読者がどのような読者反応を示すかを想像しながら読むことを通して、ノンフィクションを批判的に読むことを指導するということにある。

筆者は、日本読書学会の海外担当幹事として、2014年4月14日から16日にかけて、オックスフォード大学で開催された第2回世界リテラシー・サミットに出席した。その際に、参加者の一人であったClydeと読者の読書意欲を喚起するノンフィクションの読書指導について、2日間をかけて話し合った。彼女はそのサミットで発表があったわけではない。食事や休憩時間などを利用して、筆者が尋ねる質問に彼女が答えたりさらに説明を加えたりしてくれた。そのうちの一部は、その約1週間後にあたる2014年4月22日のノッティンガム大学におけるLSRI (Learning Sciences Research Institute) セミナーのために準備したハンドアウトを用いて行われた。LSRIセミナーの資料は非公開であるし、Clydeが日本人である筆者に対して説明を行い、筆者も質問をし、さらに説明が加わるという形で行われたので、本稿で取り上げる内容はLSRIセミナーと同じではない。したがって、本稿は、公の記録に残らなかったこの話し合いを1つの資料と考え、それをClydeの許可を得て紹介する意味も含んでいる。ただし、話し合いを全てそのまま再現したものではない。本稿では対象とならないフィクションとしての絵本の読み聞かせの例などについて、実際に書店で絵本を購入して話し合ったし、また、筆者の理解が進むにつれて、Clydeが解説や議論を端折ったところもあるからである。なお、彼女らの著書“Breakthrough to meaning”には、本稿と多少重なる吹き出しを用いたノンフィクションを読むことの指導が取り上げられているが、①その著書では吹き出しの利用ということに焦点があたっているが、取り上げている他の場面（文学を読むことや、書くことの授業）で吹き出しを用いることは我が国でも既に行われており、本稿で取り上げる意義が薄くなること、②著書の例よりも上述の話し合いの例の方が、本稿の問題意識に適合していること、の2点から、やはり上述のオックスフォードにおける話し合いを中心に考察することとした。話し合いの内容のうち、ノンフィクションを読むことの指導について重要な点を以下に記述した後、読者想定という指導法の意義について、我が国の国語科教育における文脈において論じることとする。

2. 吹き出し

漫画における登場人物の台詞を示す視覚的表示である吹き出しは、我が国の国語科教育では、専ら、文学的な文章において登場人物の心情を読み取るためのツールとして用いられている。Clydeらも、まずは、絵本や文学を読む際に吹き出しを用いている。ただ、Clydeらが頻繁に用いるのは、図1の左のような一般的な吹き出しではなく、右のような丸が連なる形の心の中を表す吹き出し（thought-bubble）である。左は声として台詞として外界に発せられるのに対して、右は発せられず心の中にとどめていることを表している。Clydeらは、左をtextと呼び、右をsubtextと呼んでいる。筆者はこのsubtextという呼び方は妥当で重要であると考えている。なぜなら、textが明示されたいわゆる外言を扱うのに対し、subtextは内言・思考といった外に出ていない言葉を扱うからである。我々がテキストを読むという行為は、内言・思考を操ることに他ならない。さらにsubという、下位を表す接頭語は、言語の階層性・多層性を表すのに適している。単に、人の心の中（気持ち）を扱うだけでなく、様々なレベルにおける言語を扱うことができるからである。本稿で述べる吹き出しを用いた読者想定というのは、想定した複数の読者において生じる下位テキスト（subtext）を扱おうとしたものであり、吹き出しは、そのことを児童・生徒に分かりやすく伝える一種のグラフィック・オーガナイザー（視覚的に分かりやすく示したもの）と解することができる。



一般的な吹き出し(text)



Clydeらの吹き出し (subtext)

図1 吹き出しの種類

3. 読者想定

実生活において文学（フィクション）を読む目的は、本人が楽しむために読むことが多いが、ノンフィクションは媒体や内容によって読者層が異なる。

図2は、Clydeに説明を求めて、オックスフォード市の書店の2階で話し合った際に、その書店のカフェ・コーナーにおいてあったオックスフォード及びバッキンガムの観光・地元情報誌である。表紙には色鮮やかな野鳥の写真が載せられており、「鳥にえさをやること―鳥類（羽の生えた私たちの友達）を助けよう」という特集が組まれているらしいということが分かる。Clydeが読者想定を端的に説明したのは、この情報誌を用いてであった。Clydeは、この情報誌の表紙を見せて、「この情報誌には、野鳥の写真が載っているけど、この雑誌をどんな人が見ると思う？」と問うた。

筆者が思いつきを述べ、さらにClydeが想像を膨らませて、想定した読者は次の4名である。Clydeはすらすら似顔絵を描き、筆者とClydeでプロフィール（年齢、立場、性格、普段の行動など）を膨らませ、さらに筆者がそれらの想定した読者がどのようなことを考えたかを想像し、それをClydeが吹き出しの中に書き入れた。以下、想定した読者の名前、プロフィール、丸括弧で吹き出しの内容を示す。

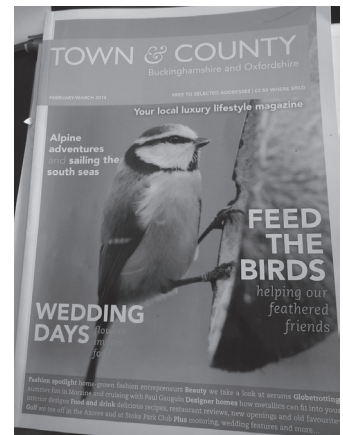


図2 オックスフォード観光・地元情報誌

○ジュリー 68歳 家の庭づくりが趣味。鳥が大好き。38種類の鳥にえさをやっている。

（まあ！ この鳥の写真ステキ。色がきれいだわ。ほんと、完璧よ！）

○ザグ ティーン期の非行少年。ドラッグをやっている。

（だれが鳥の特集なんか読むかよ？ つまらねえ！）

○パイル・ベイカー 65歳 農作業従事者。ワインをつくる葡萄農園を経営。

（この鳥は、わしの敵だ。嫌いだ。葡萄を守るために、網を張らなきゃならない。毎年鳥に葡萄をついばまれるから、本当にいらいらさせられる。）

○アダム・ジョーンズ 63歳 プロの写真家。野鳥の写真を撮影している。写真は、世界中の雑誌に掲載されている。

（この鳥は、とても撮影が困難な鳥だ。敏感で、カメラを向けようものなら、すぐに気づいて逃げてしまう。この写真を撮影した人は、長い時間をかけて、忍耐強くシャッターチャンスを持ったに違いない。）

このように、同じ雑誌の写真であっても、読者がどのような考えの持ち主であるかによって、これを見るとき印象や構え方は全く異なる。そして、これらの構え方のもと、実際に特集記事を読んでいき、それらの読者反応を吹き出しに書いていくことになる。

これらの読者想定において想像したこの鳥の性質（葡萄の実をついばむ、敏感な鳥で写真が撮影しにくい）が正しいかどうかは、筆者には分からない。しかし、このように読者想定をして読むことに意味がある。例えば、パイル・ベイカーは記事を読んで（この鳥は、わしの敵じゃなかったのか。敵の鳥に似てると思ったんだが……。もっと小さくて森の奥に住んでいるんだな。）と思い直したり、アダム・ジョーンズも（そうか。これは、結構人里にいるんだね。まあ、雀みたいなものだね。）と思い直したりするかもしれない。実際の読者もそういう誤解も含めて、先の内容を予想して、その上で読み進めていくものである。

なお、この例は読者想定例として、Clydeが挙げたもので、実際に中の記事は読んでいない。そこで、次節では、別のインターネットによる新聞の記事について、もう少し読む過程を見ていくことにする。

4. 読者想定と読者反応

4-1. 取り上げるテキストと想定する読者のリスト

次に取り上げるのは、「スター・トリビューン」というアメリカ中西部のミネアポリスに拠点を置く地方紙に載った、13歳の少年が自殺した記事についてである。もとの記事に対して、アメリカの学校外における読書推進を研究しているMark W. F. Condonによって、若干の修正がほどこされている。日本語に訳して説明のために丸数字の形式段落番号を付したものを、資料として本論文の最後に掲載する。もとはインターネットの新聞上の記事のため、1文ごとに1行ずつ空けてある。すなわち、形式段落番号と言っても、1文ごとに1つの丸数字が付してある。

Clydeはこのテキストが実話であり、実際の新聞記事をもとにしていることを述べた後、やはり「この記事は誰が読みそうか」と質問をした。下に示すリストは、Clydeと筆者で想定した読者のリストである。この例は、アメリカの小学校5年生の学級で扱うつもりで挙げた。このうち、筆者はAのキャシーを、ClydeはBのジョーを自分が「想定する読者」として選び、プロフィールなどを決めていった。ただし、本稿では、さらに読者想定という方法を明らかにするために、さらにCのトム、Dのローレンも選択する読者として付加する。また、Clydeと筆者の話し合いでは形式段落の⑤までで、それ以上は実際にそれぞれの想定した読者に基づく読者反応を書く作業をしなかった。筆者としてはそこまでこの手法が十分に理解できたと考えたからである。しかし本稿では、最後（形式段落の②⑦）まで、読者反応を考えて創作することとする。

一般的な読者

- 学校に通う子どもを持つ親 → キャシー A
- 同い年の子ども
- いじめを受けている子ども（現在／過去）
- いじめをしている子ども（現在／過去）→ トム C
- いじめを傍観している子ども（現在／過去）

関係者

- その学校の教師
- その学校の校長
- その学校区の指導主事
- 義姉（ローレン・バード）→ ローレン D
- 近所の人
- ユニオン・パシフィック鉄道職員 → ジョー B
- おじいさん（ジョン・フレイ）
- お父さん（ビル・フレイ）

4-2. 選択した想定する読者のプロフィール

次の通りとする。

- A：キャシー 45歳 14歳の少年メンディを持つ母親である。髪型は濃い茶色で、細かいパーマがかかっている。背が高い。別の州に住み、小学校教師をしている。
- B：ジョー 54歳 ユニオン・パシフィック鉄道職員。がっしりとした体格である。アレックスと親しかった。子どもはいない。だが、アレックスみたいな息子が欲しいと思っていた。
- C：トム 11歳 別の州に住む小学生である。アレックスと面識はない。大柄で、同じ学級の男子Y君に対していじめをしている。
- D：ローレン 18歳 アレックスの義姉である。髪型は金髪で、背は低い。父とアレックスの母親が再婚した。アレックスのことを大切に思い、いつも気にかけていた。

4-3. 選択した読者の読者反応

それぞれの部分について、選択した読者A～Dがどのような読者反応を示しそうかをまとめて示す。

表題及び①段落

- A（キャシー）：13歳って言ったら、メンディとほとんど同じ年じゃない。そんな子が自殺なんて悲劇だわ。
 B（ジョー）：おお。これはだれについてのニュースだか、おれは知ってるぜ。アレックスについてさ。これは悲劇だった。
 C（トム）：ふうん、いじめのニュースか。自殺するかね。
 D（ローレン）：あ、これはアレックスのことね。昨日取材に来てたから。私が話したこと、きちんと記事にしてくれたかしら。

②～③段落

- A：え？ ユニオン・パシフィック鉄道？ どうしてそこで自殺したのよ。好きな場所だったんでしょ？
 B：そうなんだよ。オレもアレックスと仲がよかった。
 C：ふうん、こいつは、大人に対しては別の顔を見せていたんだな。Yのように、大人に対してはいつもお利口ちゃんか？ 気に入らねえ。いい格好しいのか？
 D：そうだったのね。私はユニオン・パシフィック鉄道でのことはよく知らないから。でも、おじいちゃんが、アレックスは人気者なんだよって言ってたわ。

④～⑤段落

- A：ああ、行方不明でみんなで捜したのね。見つかって、親御さんはさぞかし驚いたし、悔しいし、悲しかったでしょうね。でも、お義姉さんはいじめを受けていたことを知っていた。親御さんには話せなかったのかもね。
 B：そうだよ。驚いたぜ。最初、行方不明って聞いてて、皆で捜索したからさあ。まさか死んじゃってるとは思ってたよ……。
 C：いじめだけが原因じゃないよ。そいつが弱いからだよ。
 D：自殺の原因はいじめよ。他に悩むことなんて無かったんだから。

⑥～⑪段落 昔気質のジェントルマン

- A：こういう「成熟した」タイプの子なんだ。やさしくて、賢くて、同じ年の子とは話が合わない。うちのクラスのE君に少し似ているわ。
 B：そうだよ。アレックスは優しい子だった。それにアレックスは、はつらつと話す子でさ、そんないじめを受けるタイプには見えなかったなあ。
 C：大人受けがいいやつって、嫌いさ。Yもオレらの間では、なよなよしてんのに、大人の前に出るとオレは賢いんですって感じになる。それが嫌なんだ。でも、親やセンコー受けがいいだけでなく、鉄道職員と仲がいいってのはYとは違うか。
 D：そうそう。やさしい子なのよ。私とはうまく行っていたわ。まあ、鉄道マニアだからね。彼の部屋にある鉄道模型が悲しいわ。

⑫～⑳ 学校でのトラブル

- A：まあねえ。学校ではいろいろなトラブルがあるわ。やっぱりやさしくて背の低い子はそれだけでいじめられやすいから。でも、勉強もあまりできなくて、友達がいなくて、学校には居場所がなかったんでしょ。うね。ミドルスクールだと、先生もそんなに生徒の様子を見てあげられないだろうし、何より話が合う友達がいなくてというのが、難しいのよね。メンディなんて、そんなに勉強しないのにそこそこできるし、なんたって親友がいるから、やっぱり学校楽しいって言ってるわ。
 B：オレも宿題するのは嫌だったな。でも、アレックスは頭良さそうだったけどな。とにかく、学校でトラ

ブルがあったはずだ。オレたちのところでは、あいつはとても楽しそうにしてたもの。

C：そうだよな。いじめられてるって恥だし、大人の前ではいい格好しようとしてるから、言ったりできないよな。

D：アレックスがいじめられてたことは知ってたけど、ここまで深刻だとは思ってなかった。この間のことだって、解決したって思ったのに。

②①～②⑥ 予期しなかった悲劇

A：なんて痛ましいんでしょう。13歳の少年が自殺をはかるなんて。搜索をした人たちは、ご家族は、みんなショックだったでしょうね。

B：ああ、思い出す。アレックス、なんで自殺なんかしたんだよ。お前、いつも楽しそうだったじゃないか。お前が来たときは、職員はみんな、あの気むずかしやの課長でさえ、嬉しがってたのによ。お前は人気者だったんだぜ。ああ、一緒に搜索して発見したジムの叫び声と、アレックスの父親の泣き声が、忘れられないよ。

C：なんで自殺したんだよ。おやじが軍人会イベントに行った時には、もう死ぬつもりだったのか？ 銃殺って、なんでそんなことしたんだよ。いじめって言っても、じゃれてるだけだったかもしれないだろう。そんな深刻に受け止めんなよ。なんで死ぬんだよ。

D：そうよ。そんな自殺するような深刻な様子じゃなかったわ。ウィスコンシンから帰ってきた時は、普通だった。ただ、学校が始まるのが面倒くさそうにはしてたわね。こんなに悩んでるなら、もっといろいろと相談に乗ってあげればよかったわ。悔やまれる。

②⑦～③⑦ いじめが原因か？

A：13歳の少年の内面をつかむのは、本当に難しいわ。いじめは大きな要因かもしれないけど、他にも人生に対する漠然とした不安とか、表面的にはうまく行っているように見せているけど新しいお父さんとのこととか、いろいろあったのかもしれないわ。でも、いじめ防止研修は、今回のことがいじめだけが原因でなかったとしても、意味がある。この記事に書いてあるのは、教師の研修だけでなく、生徒にも行うっていうじゃない。きっと、生徒同士の人間関係を築けば、今回のケースだって防げたかもしれないもの。それにしても、自殺は取り返しがつかないわ。本当に、こういうことは、防止しなければならないわ。

B：学校でいじめ防止に取り組むってのはいいことだろうけどさ、効果があるのかね。それより、オレにできることはなかったらうか。学校って言っても、数年間で通りすぎるじゃねえか。アレックスは鉄道職員になりたいって言ってたからさ、そういう人生の目標があるなら、数年間なんで踏ん張れなかったんだろう。オレも、もっと励ましてやればよかった……。

C：いじめで死ぬなよ。死なれた方だって、いい気はしねえ。だけど、いじめられているやつだって、それなりに悪いんだぜ。不愉快な思いをさせてんだから。その不愉快な思いを止めてくれるんなら、研修になるだろうけどよ。「悪意のない傍観者」か。オレたちのまわりでもいるなあ。

D：そうよ。いじめが原因よ。彼は本当にいい子だったわ。とても残念。アレックスは本当に戻ってこないのよ。これから、こんな悲劇が繰り返されないように、ぜひ、教育委員会には防止策を練ってほしいわ。

以上のように、想定した読者それぞれの立場から、この記事にどのように反応しそうかを示してみた。実際には、これらの反応は、読者（人物）別のワークシートの吹き出しの中を書くことになる。吹き出しを通して、それぞれの読者のこの問題に対する見方というものが浮き彫りになる。それを、授業ではシェアし、交流して、複眼的に、このノンフィクションの記事をとらえることになる。次にその指導過程を見てみよう。

5. 吹き出し法による読者想定の指導過程

ここで、Clydeの考える、読者想定の指導過程について示す。

ステップ1 まず、自分自身の立場で読んで感想を持つ。

ステップ2 どのような読者がこの本や記事を読むか、想定できる読者のリストを作る。

ステップ3 リストのうち一人を「想定する読者」として選んで、プロフィール等を作る。(5～7分)

- ・ワークシートの中央部分に、容姿をスケッチする。
- ・プロフィールなどの詳細（氏名・年齢・性別・民族・文化、内容に関係のある生活上の経験や個人的なつながり、性格・気にかけていること・感情など）を書く。
- ・教師はOHCなどを使って実演し、十分に見本を示すことが重要である。

ステップ4 「想定する読者」をシェアする。

- ・パートナーとシェアする。(5分)
- ・クラスでシェアする。(5分)

ステップ5 「想定する読者」としての読者反応を吹き出しに書き込む。

- ・この活動についても、教師の様々なパースペクティブによる実演が重要である。

ステップ6 「想定する読者」としての読書経験を振り返る。

- ・想定する読者の立場から読んで、何か最初の読み方と異なることはあるか。どんなことを読み、考え、感じたか。

ステップ7 経験を発表し、ディスカッションをする。(主にグループ)

ステップ8 さらに、クラスで話し合う。(タウンミーティング)

ステップ9 別の読むことあるいは書くことにつなげる。

LSRIセミナーのハンドアウトでは6段階が示されていたが、ここでは筆者の質問への回答を含める形で、9段階で示す。具体的に増やしたステップは、ステップ4とステップ8とステップ9である。すなわち、どのように想定する読者をシェアをするか、他の人の読者反応と交流をするかという点について筆者は質問をした。Clydeのそのことに対する回答が重要であると考えたので、これらのステップを付け加えた。なぜなら、この指導法の重要な点は、複眼思考にある。自分の立場で読むのではなく、想定した読者の立場で読むのである。想定した読者の数が多ければ、より多面的にこのテキストを検討することができるし、後で述べるような批判的な読みにつながる事が期待されるからである。前述の13歳の自殺（いじめ）の例で言えば、ステップ7やステップ8でそれぞれの立場から自殺の原因を考えたり、いじめについて考えたりすることが交流される。

Clydeの話では、ステップ8のタウンミーティングとは全体交流の意味であるが、この段階でかなり熱心な話し合いが展開されるという。ステップ9については、最初はこのいじめの記事で行い、次に別の話題で行い、三度目は子ども自身に話題を決めさせるとよいという。

筆者の理解では、記事などの短いものであればステップ1があるが、長いものであればステップ1は省略して表題等からどんなことが書かれているか想像するのかよいのではないかと考えている。これは、前述のオックスフォード観光・情報誌でも触れたことであるが、そのテキストを誰が読みそうかを考えることは、必要な場面での読書や目的を持った読書の指導の一環として重要なことである。その際には、自分の立場から一読した後読者を想定することが不自然であるかもしれない。そうであるならば、想定した読者ならどう読むかというステップ2から入っていったほうがよいと考えている。

6. ノンフィクションを読むことの指導における読者想定の意味

このような読者想定を使用したノンフィクションを読むことの指導には、どのような意義があるのか。我が国における読むことの指導の歴史に沿って、その意義を3点述べる。

6-1. 読者反応理論（読者論）における意義

我が国の説明的文章指導においては、倉澤栄吉による筆者想定法や、小田廸夫によるレトリック認識法など、筆者を想定し、その筆者がどのような意図でその文章を書いたかを想像し、分析的に読んでいくという

方法が、1970年代から1980年代に開発された。この過程や、様々な論者の論点の違いについては、正木友則の一連の研究（正木2012、正木2013など）に詳しい。塚田泰彦は、「最近の読みの研究では、文章の意味理解行為は受動的なものではなく、読者の能動的な意味生成行為によって成立していると考えようになっている。しかし、これまでは研究・実践両面で読みにおけるこの読者の側からの働きかけが過小評価され、読むことは読者の側の問題であるよりも作者の作品の側の問題とされてきた。この点を反省して、読者の側に立った明確なアプローチをとることがこれからの読みの教育の中心的な課題である」（塚田、2001、p.7）としている。この著書の発刊から10年以上が経過しているが、まだこの状況が払拭されているとはいいがたいであろう。

本稿で捉えた読者想定は、この状況に対して正面から応じる、一つの力強い指導法であると考えている。なぜなら、筆者想定法がいかにテキストの生まれるその生き生きとした状態に読者を立ち合わせているとは言え、やはり筆者の執筆の工夫を絶対視したり規範的に読んだりすることを十分に阻止するとは言えないからである。塚田は、「現在この読者論的实践を支える原理面や方法面での追究は十分には行われていない。このため、現状では、学習者個人の読みを価値づける原理が曖昧なまま、読みの指導過程上に読者一人一人の読みを位置付けることが目的となり、その位置づけも機械的になりがちである。英米の（文学作品中心の）読者反応研究をふまえた学習指導の開拓にはまだ手が届かない段階にある。このため、学習者側の論理をどう扱うかという生産的な議論がないまま、目下暗礁に乗り上げた状態である。」（塚田、2001、p.29）としている。しかし、この読者想定という方法を用いれば、学習者個人の読みを価値づけることの意味を、学習者とともに、分かりやすい形で扱うことができるのである。複数の想定された読者の反応は、学習者の論理を相対化した上で、読者反応という読む営みを、議論の俎上に載せることができるからである。

6-2. ノンフィクションを読むことの指導という意義

二番目の意義は、この読者想定という手法が、単に説明的な文章の読解指導だけでなく、様々な媒体におけるノンフィクションの読書指導に開かれているということである。ここでの利点は三つある。

一つ目は、現実場面での読書に近い形の読むことを指導できるという点である。読者想定最初の教師の発問は、「この本（記事、雑誌等）は誰が読みそうか」である。世の中に流通する様々なテキストが、どのような読者に、どのような場面で、どのような目的で読まれるかということと合わせて、指導することができる。

二つ目は、この読者想定という方法が、多読につながり易いということである。読者想定によって現れた様々な読者の立場の相違から、それぞれの立場を支持する他のテキストを読むということが行われやすい。例えば、Clydeらは、このいじめのテキストの他に、移民問題についてや喫煙と禁煙についてなど、複数の対立する立場を持つ問題を取り扱ったテキストを薦めている。例えば移民問題で言えば、典型的には、移民を受け入れた方がよいとする側と、移民を無制限に受け入れるべきではないとする側の二つの立場がある。それぞれの立場を強化する他のテキストを読むことが、先行知識の拡充とあいまって、扱い易いのである。

三つ目は、規範的ではなく批判的に読むということにつながる可能性があるという点である。現実的には、本稿で取り上げたようないじめや政治的問題に関する記事は、教科書教材にはなりにくい。戦争などの政治的社会的問題が教科書教材には取り上げられてはいるが、それを本当の意味で複数の立場の読者を想定して読むということにはなりにくい。従来の国語科では「いじめはいけない」「戦争をしてはいけない」のように、規範的な読み方を促してきた。しかし、生の新聞記事、雑誌記事、その他の情報などは、それを支持する多様な意見・情報が様々な媒体に掲載されており、複数の立場に基づく批判的な読みを促しやすいということが言える。なお、批判的に読むことについては、次節でもさらに述べる。

6-3. 批判的に読むこと（critical literacy）の意義

冒頭でも述べたように、Clydeらの著書“Breakthrough to meaning”には、ノンフィクションを読むことだけでなく、フィクションを読むことや児童が何かを書くことに対しても吹き出し法が用いられている。その中でノンフィクションを読むことを扱った第2章には、クリティカル・リテラシーを育てること（Fostering Critical Literacy）というタイトルが付けられている。このことは、非常に興味深い。なぜなら、

読者想定を用いて、様々な読者の立場で読むという行為が、クリティカル（批判的）に読むということにつながっていることを示しているからである。

クリティカル・リテラシーは、1990年代の後半からアメリカや英語圏で広がっている考え方で、リテラシー（読み書き）が単純な読み書きではなく、その情報の送信者や受信者の目的、情報が載っている媒体などもふまえて、批判的でなければならないとする考え方である。我が国では、メディア・リテラシーが比較的この考えを取り入れているが、クリティカル・リテラシー、批判的リテラシー、マルチリテラシーなど類似の概念も紹介されている。

我が国の国語科教育の動向で言えば、2000年以降3年ごとに行われているOECDの国際学力調査PISAで、我が国の生徒が苦手とする熟考・評価が、批判的に読むことと近い関係があることが指摘されている。このことをふまえてみると、読者想定は批判的に読むことを促す効果があることが期待できる。なぜなら、PISAの熟考・評価は、テキストの内部に書いてあることを正確に読むだけでなく、テキストの外部にある知識を利用して読むことであり、テキストの外部にある、すなわち、読者における知識によって、その読み方が変わってくるからである。読者想定を通して、批判的に読むことの指導がより扱い易くなるし、吹き出し法は、児童・生徒にそのことを分かりやすく示す、グラフィック・オーガナイザーであると言える。

7. おわりに

以上、本稿では、Clydeらの吹き出しという手法による読者想定を手がかりに、ノンフィクションを読むことの指導の新しい方法を示した。そこでは、従来の筆者想定とは違う、読者の側に立った、新しい指導の可能性が見いだせた。また、多読や批判的に読むことなど、ノンフィクションの読書指導への展開も期待される。

今後は、この読者想定の方法が、どのようなノンフィクションの材料に適しているか、検討を重ねる必要がある。児童・生徒の想定した読者の読者反応について、データを収集し、この方法の有効性について、さらに検証していきたい。

附記

本研究は、平成26年度～平成28年度科学研究費補助金事業（基盤研究（C））「読者反応理論に基づく国際標準を反映した児童・生徒・教員用読書力評価パッケージ開発」の助成を受けている。

文献

- Clyde, J. A., Barber, S. Z., Hogue, S. L. and Wasz, L. L. (2006) *Breakthrough to meaning: Helping your kids become better readers, writers, and thinkers*. Portsmouth, NH: Heinemann.
- 倉澤栄吉・青少年国語研究会（1972）『筆者想定法の理論と実践』共文社
- 正木友則（2012）「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討—1980年代を中心に—」『全国大学国語教育学会発表要旨集』122, 67-70.
- 正木友則（2013）「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討—学習過程の類型化を中心に—」『全国大学国語教育学会発表要旨集』124, 45-48.
- 小田勉夫（1986）『説明的文章の授業改革論』明治図書
- 塚田泰彦（2001）『語彙力と読書—マッピングが生きる読みの世界—』東洋館出版社

資料 スター・トリビューン誌の記事

家族： いじめが招いた13歳の自殺（ワイオミング州）

【スター・トリビューン首都局】 ジェレミー・ベルツァー 2012年1月5日（木）午前8時00分掲載

①シェイアン・アレックス・フライ君は他の13歳の子どもたちといるときは、おとなしいはにかみ屋だった。家族によれば、彼は学校で友だちがなかなかできず、クラスメートにしょっちゅうからかわれたり、いじめられたりしていたという。

②しかし、大人たちといるときは、アレックス君は別人だった。彼はおしゃべりで、すぐに仲良くなり、長い時間、列車に関する知識を披露して、ユニオン・パシフィック鉄道のベテラン職員らを感じさせていた。

③そういった200人ほどの大人たちが、水曜日にアメリカ在郷軍人基地6番集会所に詰めかけた。日曜日の朝早く、アレックス君がユニオン・パシフィック鉄道車両基地の南側にある草むらで銃自殺を図ったという捜査報告を聞いたからである。

④3日間にわたる数百人のボランティアによる搜索は、火曜日にアレックス君の遺体が発見されるという悲劇的な幕引きとなった。

⑤アレックス君の家族は、彼が自殺を考えていた兆しはまったく感じられなかったと話したが、彼の義姉は自殺の直接的な原因は、学校で繰り返しいじめを受けていたことに違いないと語った。

‘昔気質のジェントルマン’

⑥家族や友人、隣人たちは、アレックス・フライ君のことを、賢く思いやりがあり、おそらく彼らが知るなかで一番成熟した13歳だと記憶している。

⑦「彼の体は子どもだけれど、中身は昔気質のジェントルマンでした」と、フライ君の隣人であるリンジー・パワーさんは話す。「誰かが庭仕事や、何かしていると、あの子はいつも手伝いましょうかと最初に尋ねに来てくれました」

⑧「義弟は自分と同年の子どもたちよりも、大人とうまくやっていけるタイプでした。13歳にしては、誰もかなわない精神性と智慧を持っていたから」と義姉のローレン・バードさんは語る。

⑨アレックス君は特に熱中しているもの、つまり列車のこととなると、誰にも引けを取らなかった。彼は鉄道模型を持っていたが、ワイオミング州シェイアンにあるユニオン・パシフィック鉄道の車両基地に実物大の列車もよく見に行っていた。やがて、すぐに鉄道職員に仕事について尋ねるようになり、エンジンや鉄道の操作について豊富な知識で相手を驚かせた。

⑩アレックス君の祖父のジョン・フライさんによると、数年前に一度訪れたとき、アレックス君は線路のところで働いている鉄道職員に気が付き、そのブレーキ係と話し込んでしまったという。

⑪「次にどうなったかというね、彼らは孫に実際に機関車を運転させてくれたんですよ」とジョン・フライさんは言う。「彼らはあんな子には会ったことがなかったんですね。あの子は15分か20分話しただけで、人に11歳の子どもを信用させてしまうといった印象でした」

学校でのトラブル

⑫しかし、毎朝の登校時間になると、アレックス・フライ君は決して熱心な様子はなかった。

⑬身長たった150センチのおとなしい子どもだったアレックス君は、キャリー・ミドルスクールでよくいじめを受けていたと、ビル・フライさんは言う。

⑭ビル・フライさんによれば、「ときどき宿題をするのを嫌がり」、アレックス君の成績は振るわなかった。アレックス君が学校に行きたがらないので、家にいる日もあったという。

⑮「あの子はつらくて学校に入れないんですよ。他の子どもたちがいびったり何やかやとしたので。あの子はそんなところに戻りたくなかったんです」とビル・フライさんは話した。

⑯ローレンさんが言うには、数ヶ月前にアレックス君は学校を抜け出し、数時間後、車両基地で機関車を眺めているところを見つけたという。

⑰ビル・フライさんが、アレックス君に学校で大変なのではないかと尋ねると、話しながらいることが多かったという。

資料 スター・トリビューン誌の記事（続き）

⑮「学校に迎えに行ったら、何か嫌なことがあったらしくて。でも、あくる日、迎えに行くと、『ああ、もうみんなと仲直りしたから、大丈夫だよ』と言うのです」

⑯「それが本当だったのかどうかはわかりません」とビル・フライさんは言った。

⑰こういったことがあっても、家族はアレックス君が学校でどこまでいじめられていたのか、まったく知らなかったと話した。

予期しなかった悲劇

⑱先週の土曜日、ビルさんとアレックス君はウィスコンシンへの旅行から帰宅した。学校が始まるのは2日後に迫っていた。

㉑午後6時ごろ、ビル・フライさんは米国在郷軍人会の大晦日イベントに出かけた。アレックス君は、けがをしている犬の世話をするので家に居たいといって残った。

㉒真夜中を少し過ぎたところにビルさんが帰宅すると、アレックス君の姿はなかった。

㉓その後3日間、アレックス君が行きそうな車両基地やその他の場所で大掛かりな搜索が実施された。

㉔火曜日の朝までに、約250人の人々が搜索を手伝った。その朝、ユニオン・パシフィック鉄道職員が車両基地のそばの草むらでアレックス君の遺体を発見した。アレックス君は頭部の一か所の銃傷が原因で死亡した。

㉕ビル・フライさんを始めとする彼の家族が話すには、アレックス君からは自ら命を絶つことを考えている前触れもなく、またそのような素振りはまったく感じられなかったという。

いじめが原因か？

㉖ワイオミング州の自殺防止チームのリーダーは「こんなに若い子が自らの命を絶つことはまれです。過去10年間にワイオミング州で記録された873件の自殺のうち、13歳以下によるものはわずか7件です」と話した。

㉗なぜ、アレックス君は自殺したかったのだろうかと尋ねられ、ローレン・バードさんはためらわずにこう言った。

㉘「私の心の中では100パーセント、間違いなく、これはいじめが引き起こしたのだと思っています。アレックスと父親とはとてもうまくいっていました。母親とも大の仲良しでした。アレックスの人生には、たくさんのことが起こっていました。」

㉙バードさんはアレックス君の死は、いかなるいじめも見逃してはならないという学区の教育委員会に対する警告に違いないと言った。

㉚「弟は逝ってしまいました。もう、取り戻すことはできません。でも、誰か他の人の子どもにこういったことが起きないように、努力し防止することはできます」

㉛水曜日、教育委員会の担当者はアレックス君の死の知らせにショックを受け、悲しんでいると話したが、アレックス君に関するいじめ問題の記録はないと述べた。

㉜マーク・ストック教育長は「あのような悲劇的なかたちで生徒が自らの命を絶つときには…多くの場合、たくさん問題が…その子の生活のなかで起きています。そして、学校もその一つに入ってしまうでしょうが、アレックス君がおそらく誰も知らない、何か他の問題で苦しんでいたのだとしても驚きはしません」と語った。

㉝ストック教育長によれば、本学年度の終わりまでには、当学区内の大半の教員はいじめ防止研修を受けることになっているという。

㉞この秋には、その研修を生徒たち、特に、他の生徒がいじめられるのを見ている‘悪意のない傍観者’にも拡大して行う予定である。

㉟「ここで重要なポイントは、こういった見ている生徒たちに研修を実施し、そのようときにはどうすべきかを教えることです」とストック教育長は言う。

㊱ジョン・フライさんは「あの子はシェイアンの町で忘れられることはありません、絶対に。これだけ多くの大人たちが彼の友だちなのですからね」と語った。